

近江物産



芝原社長

ポリプロピレン（PP）

再生大手の近江物産は、高品質の再生PPで攻勢をかけていく。とくに車載用内装材などに使用されるPP再生材では、バージン品に迫るスペックを実現するなど技術力には定評があり、信頼性も高い。

プラスチック資源循環では政府が2030年にリサ

高品質の再生PPで攻勢 車載用内装材などに採用

イクル品使用の倍増を掲げている。「サーキュラーエコノミー（資源循環）実現へリサイクルは重要。当社は再生品を市場へ循環させる心臓産業と自認しており、今後、品質向上を進めつつ実装的なプラットフォームを構築していく」（芝原誠二社長）と意欲をみせる。

現在、廃プラを年間約2万トンを粉碎・ペレット加工しているが、特筆すべきは徹底した品質管理。材料研究室を設置し評価・分析機器類を駆使した工程管理や品質チェック体制を構築、人材育成の一環で社員に品質管理検定を受講させるなど、品質の安定化を実践するほか、2軸スクリーン混練押出および造粒ラインを設置、全8種の材料の混合や計量、供給が行える。添加剤の微量定量供給とタルクなど無機充填材の高濃度供給装置は顧客ニーズに合ったコンパウンド品も製造

可能。

「試行錯誤をしながら、求めるスペックに合わせ繰り返しモディファイしてきたことが、バージン品にも劣らない製品を安定的に供給できる技術につながった」（芝原社長）そうで、設置した車載向け専用のPP製造ラインも増設している。

高品位化に向けては地域連携や産学官との共同開発も進めており、滋賀県工業技術センターや滋賀県立大学、龍谷大学の指導の下、新素材、新商品の研究・開発にも取り組んでいる。

現在、主用途は自動車部材向けと住宅関連向け、物流資材向けの3分野。今後期待するのは自動車部材向け。そのため「現在は9割以上がPP品だが、リサイクル品の普及拡大にはアクリロニトリルブタジエンスチレン（ABS）などその他樹脂のリサイクルも強化したい」（同）考え。